

コーパス分析システムを活用した作文指導の可能性

本間 妙・山本 裕子 (愛知淑徳大学)

1. はじめに

日本語学習者の作文指導では、個々の誤用の傾向を把握することが有用である。近年は大規模コーパス (I-JAS 他) を活用し、誤用などの一般的な傾向を知ることができが、実際に指導中の学習者の作文を分析した研究 (楊 2014 他) では、手作業による多大な労力を要している。筆者らは、教師自らが収集したデータを取り込んで分析できるコーパス分析システム¹ (以下システム) を開発、運用している。当システムは研究の目的に応じて対象データにタグを付し、誤用など教師が見たい箇所の分析ができる機能を備えている。本発表では、このシステムに、学習者の作文を取り込んで個々の誤用の傾向を把握し、それをもとに指導を試みた実践の報告をする。

2. 研究方法

目的：学習者の作文の誤用分析結果を作文指導に活用し、その効果を検証する。

対象：JLPT N2 レベルの交換留学生 4 名による作文のうち、「指導前」の 32 件 (8 件×4 名) および「指導後」の 24 件 (6 件×4 名) の作文。

実践した授業：「アカデミック・ライティング」の授業で行い、表 1 に示したように、授業の中ほどの時点でそれまでの作文から誤用傾向を見出して示した。

表 1 「アカデミック・ライティング」の授業概要

	授業(週)	授業内容	授業での文章作成	*授業外での文章
指導前	1~6	アイデアの練り方, アウトラインの立て方, 書き言葉・文体のルールなど	2回	春休みの宿題 4 他の授業 2
指導	7	学生ごとに誤用傾向を示して指導		
指導後	8~15	テーマの絞り方, 接続表現など	3回	他の授業 3

*誤用傾向をより正確に把握する(指導前), 指導の効果をより正確に見る(指導後)のために対象に加えた

分析方法：作文中の全ての誤用に以下のように誤用タグ「誤」を付す。

| 適切な語形 | (タグ種目 実際に用いられた語形 : タグメモ)

例 1) 中国語 | に | (誤 で : 助詞で) 曖昧表現はほとんどないが, タグメモには誤用の種類を記載する。例 1) の「助詞で」は「に」にすべきところ「で」を用いた「助詞で」の誤用である。誤用は全 18 種類に分類し, 「ねじれ文」のような文レベルの誤用は, 別途メタ情報として付した。これらを付した作文をシステムに取り込み, 誤用の傾向を分析した。

3. 学生への指導と結果

まず、「指導前」の 32 件の作文から A~D の学生ごとに種類別の誤用を検索した（表 2）。この結果から誤用傾向を見出して指導する項目（表 2 の網掛け）を決定し、図 1 のような指導シートを作成した。そして、各学生に個別に指導シートを示し、以降、作文を書く際に気をつけるよう指導した。その後に「指導後」の 24 作文についても同様に誤用傾向を分析した（表 3）。

<p>「だ・である体」で文章を書くときに気をつけましょう。Aさんは以下のことが間違いやすいです。</p>	
1.	<p>助詞の脱落（助詞を入れなければいけないところに入れていない）★特に助詞「<u>の</u>」と助詞「<u>に</u>」が脱落します。 ex. どうして使ってはいけない<u>の</u>か納得できなかった。 ex. 親がそばにいる<u>の</u>とは違い、～ ex. 今までに自分が身につけた日本語とは少し違うと感じた。</p>
2.	<p>書きことば（うっかり話しことばを書かないように）★特に連用中止形にするのを忘れがちです。 ex. 勉強の種類と内容も好きなように<u>選べ</u>（選べず）、好きな時間と場所で学べる。 ★Aさんが使った話しことば ex. <u>ぐらい</u>、<u>でも</u>、<u>みたいに</u>、<u>いろいろな</u>、<u>けど</u>、<u>そんな</u>、<u>ずっと</u>、<u>だんだん</u>、<u>ちょっと</u>、<u>コンビニ</u></p>
3.	<p>時制（文の中や文末の時間を意識しましょう）★「<u>～た</u>」で書くべきところを「～る」で書くことが多いです。 ex. ユーモアのある先生が<u>いた</u>（いる）おかげで、勉強はそれほど大変では<u>なかった</u>。</p>

図 1 指導シートの一部抜粋（誤用例はすべて学生 A の作文中に出現したもの）

表 2 指導前の作文に出現した学生 A, B, C, D の種類別誤用の数

	助詞			助詞脱落	助詞過剰	語選択	活用	時制	態	表記	*書	*敬	*体	語脱落	*SV不要	*SV必要	接続	並列	漢字	不要な語	ねじれ文	総語数
	が	で	他																			
A	6	2	27	16	3	34	5	16	2	7	38	1	1	11	2	5	2	2	1	3	8	2446
B	35	1	22	9	2	79	11	2	8	9	52	0	6	15	6	2	2	0	2	1	8	2170
C	4	6	14	17	1	49	8	4	0	0	42	1	1	13	2	2	2	0	2	0	12	2650
D	9	0	18	2	1	47	8	4	4	0	46	4	1	13	2	3	6	0	0	4	28	1985

表 3 指導後の作文に出現した学生 A, B, C, D の種類別誤用の数

	助詞			助詞脱落	助詞過剰	語選択	活用	時制	態	表記	*書	*敬	*体	語脱落	*SV不要	*SV必要	接続	並列	漢字	不要な語	ねじれ文	総語数
	が	で	他																			
A	1	2	8	7	3	44	3	9	1	12	7	0	2	11	2	2	5	1	3	0	1	1774
B	7	1	35	16	3	87	11	10	2	8	29	0	4	21	4	9	6	5	2	12	6	2825
C	1	1	11	6	0	38	2	5	0	2	12	1	1	3	0	4	3	2	0	1	3	1422
D	2	1	7	3	0	24	1	0	0	2	19	0	0	2	2	1	1	1	0	1	2	2281

*書：書き言葉のルール違反，敬：敬体になっている，体：だ・である体ができていない，SV：補助動詞

システムの活用により各々の誤用傾向が容易に把握できた。授業後の自己評価表の記述等からは、各自が間違いやすい項目を明確に意識したことがわかった。また、指導前後の誤用数の差を指導項目と非指導項目について t 検定を行ったところ、有意差が認められた（指導前後の誤用数差の平均値：指導項目, .49%, 非指導項目, .01%, $t(3)=13.35, p=.001$ ）。このことから、指導に効果があったと考えられる。

注

1. <https://cochu.org> を参照のこと。

参考文献

楊帆(2014). 「中級日本語学習者の作文における困難点: 文構造の呼応関係について」 『秋田大学国際交流センター紀要』 3: 15-28.

I-JAS 多言語母語の日本語学習者横断コーパス <https://chunagon.ninjal.ac.jp/static/ijas/about.html> (2020. 7. 6)